

蝸牛くも
Kagyu Kumo

イラスト
伊藤 悠 Itoh Yu

今川氏真無用剣

天下第一蹴

でんかいつしゅら
いまがわうじざねむようけん



天下一蹴 今川氏真善用劍

蝸牛くも

序段、「突延」

蹴られた鞠が、雲に吸い込まれるように天高く跳ね上がった。
蒼天の彼方、目を凝らしても見えない果てへ。

——ああ、消えてしまふ。

そう思った瞬間、鞠は音もなく地へと落ちる。

真っ直ぐに、蹴り手の元へ。

蹴り手は鞠に目もくれず、しかし、わかっていたかのように身を反らし。

そして再び、ぽおんと鞠を蹴りあげた。

鞠は瞬きをする内にも弾み、跳び、落ち、また上がる。

静かな寺の境内に、さわさわという葉擦れの音と、鞠の跳ねる音だけが響く。
それを、私はじいっと見つめていた。

目が離せなかった、のかもしれない。

私だって、仮にも女の子だ。

侍女と一緒に、手鞠を突いて遊んだりもする。

けど、鞠がこんな風に弾むものだ、なんて。

今の今まで、思いもしなかった。

爪先で。

踵で。

前に。

後ろへ。

目まぐるしく動きながら、決して落ちることなく、鞠が上がる。

かと思いきや木の枝を目掛けて跳び、返ってきたところを受けて、蹴る。

生きている、なんてものじゃない。

私には、彼の足と鞠に、魂が宿っているようにしか思えなかった。

「あっ！」

私は声を出してしまった口元を押さえ、目を見開いた。

ややあつて、何の間違いか、鞠が大きく外へと弾んだ。

しまった、と思ったのはその時だ。

蹴り手が、おや、という風に視線を逸らす——此方へ向ける。

この時、私は初めて彼を見た。
十四か、五。年の頃は私とそう変わらない、元服前後の、武家の少年。背丈は並だけれど、着物の上からでもしっかりと引き締まった体軀。前髪を残して鬚を結った総髪まげの、朴訥ぼくたくそうな顔立ち。そして何より、その目。

私を見る彼の、黒い瞳ひとみが。心底から楽しそうに輝いている。

「ああ、すまなんだ。退屈しんくつ凌しのぎに始めたら、熱が入ってしまった」

話す声は、飄々ひょうひょうとして、軽い。

私は「鞠まが」と、辛うじて呟ささいだだけ。

鞠は——落ちなかった。

地に触れるか否かという、その刹那せつな。

俊敏しゅんびんに伸ばされた爪先が鞠を受け、また天へと蹴飛ばしたのだ。

目にも留まらぬ早業はやわざ。

その見事な業前は、蹴鞠けきまが何か、わからない私にだって理解できる。

頭上へと跳んだ鞠を胸元に落とし、彼は難なく受け止める。

「何方どちからの姫君ひめぎみだろう？」己おれに、何かご用命ごようめいか？」

あまりにも自然に、額ひたいに汗一つ滲にじませぬ態度が。

……というより、ただ鞠を蹴る動作に、我を忘れてたという事実が。なんだか、とつても悔くやしかったものだから。

「名を問うのなら、まず自分から名乗りを上げるべきじゃない？」

私は凜れいと胸を張り、爺じいに文句をつける風に、つんと澄すまして言い放った。

しかしこれまた小憎こにくらしいことに、彼は「それも道理」と笑って。

彦五郎ひこごろう

父様に連れられて来た善得寺ぜんとくじで。

退屈しんくつそうな評定ひょうていに明け暮れる大人の目を抜けた私は。

この時、初めて——……。

「己おれは、彦五郎ひこごろうという」

——自分の嫁よめぐ、夫と出会ったのだ。

第一段「八束脛」

後に天正と呼ばれるその初夏は、ひどく汗ばむ暑さであった。
 浜名の湖を越えて吹く風が、さわさわと街道横の下生えを揺らして抜けていく。
 それがまた随分と爽やかで、汗の滲んだ額に心地良い。

「さて、どうしたものかな」

ひよろりとした若侍である。

素肌は色白であったのだから、今は日に焼けて浅黒い。

その頭は総髪で、鬘を結っていたが、月代は剃っていない。

かつては上等だったろう着物も、今となつては古着同然。

懐中には幾ばくかの銭。背にはさして中身の無さそうな振り分け籠。

そして腰には二本の大小差し。

黒漆塗りの鞆など、拵えが立派なのは刀のみ。脇差しは見窄らしい。

大方どこぞの戦場で刀だけ拾ったのだろう。

一見して、食い詰めた旅の牢人（牢籠人、務め無き者の意）者なのは明らかであった。

しかし風を浴びながらにこにこと笑う彼は、その一切を気にした様子がない。
 いっそ愉快で仕方ないと、そんな表情である。

青空と大地に挟まれた湖を眼前に、彼は全くの自由だった。

「どうしたものかな、じゃあないでしょ」

若侍の隣から、高く澄み切った声が響く。

咎めるような声の主は、やはり年若い、長く美しい黒髪を持つ娘である。

額髪を眉のあたりで切りそろえて残し、垂髪を鬢削ぎにした、古風な下り髪。

その容貌は、まるで女雛をそのままの大きさにしたような愛らしさがあった。

「このまま後回しにするつもり？ 厄介が後から来るのは御免よ」

ただし服装を除けば、だが。

目にも鮮やかな朱色の小袖を膝のあたりでばつさり切り落とし、金糸の腰帯。

さらにその上から羽織るのが、よりにもよって黒地に昇り龍の陣羽織である。

質素な若侍と比較して、悪趣味とさえ取られそうな装飾過多。

腰に手を当て気取った風でも様になるのは、その美貌によるものだろう。

彼女の言に、若侍は、困ったなと言う風で自らの顎をかいた。

「別段、己がやらねばならない、というわけでもないと思うが」

「なら、私ができる」娘は頷いた。「着物が汚れたら、すっごく落ち込むけど」

「む……」と若侍が呻く。
「それが嫌なら相手をしなさい」

「うむ」

有無を言わさぬ娘の言葉に、しかし若侍は応じて振り返った。その視界の先。土埃の舞う街道横の下生えが、がさりと揺れた。丈高い草をかき分けるように、ぬっと立ち上がる黒い影。

それが一人、二人……いや、三人。

見るからに薄汚れた鎧具足。汗ばみ、垢染みた肌。手には長巻、野太刀、槍が光る。剣呑な表情を見ずとも、その出で立ちだけで何者かは一目瞭然であった。

「野伏（盗賊の意）か」

「おう、此処いらは俺たちの道だ！ 通りたけりゃあ、出すもん出しな！」

「浜松城下も近いというのに、良くやるものだ」

若侍が、ひどくのんびりとした様子で言った。

「目当ては銭子かね。それとも、刀かね」

長巻を担いだ頭目と思わしき男がそれに怒鳴り返す。

「全部に決まってるんだろおが！」

「全部か」

「もちろん、そっちの娘もだ！」

「蔵春も、と来たか」

にやにやと厭らしく笑う頭目の目が、舐めるような目つきで娘の体軀を値踏みする。娘——蔵春は、ひどく冷めた目で野伏たちを見返した。

と、その目が彼らの具足に留まる。

もはや漆も剥がれ、地金が見え隠れする朱塗りの胴丸。

そこに描かれている、酷く掠れた四つ割菱紋。

蔵春が、ひどく苛立たしげに呟いた。

「……武田紋」

「おうとも。俺たちやあ、泣く子も黙る、武田の赤備えよ！」

「当代きつての精兵が、軍を足抜けして自慢気に野伏に励むか」

自慢気に胸を張る野伏に、「くす」と、思わず蔵春が笑いを漏らす。

「やっぱり軍師の道鬼齋が亡くなつてから此方、甲斐の虎はたふれてるわよね」

「うるせえ！」

野伏の頭目が唾をまき散らして怒鳴る。

「そっちの抜作なんざ、戦に出張る気もねえ、すくたれもんじゃあねえか！」

今度は、彼らが若侍を嘲る番であった。

月代とは、かまど髪を被る時に頭皮が蒸れないように、髪を剃る風習である。つまり月代の無い彼は、武士であるにもかかわらず、戦に出る気がないという事だ。それでは仕官の口などあるわけもなく、牢人もやむを得まいと言える。

野伏どもの下卑た笑い声に囲まれて、しかし若侍は動じない。

参ったなといった風に頭をかくばかりで、それを見た蔵春が不満気に鼻を鳴らす。

「腰のモンも飾りだろオヨ！ 何流だ、うん？ 言つてみいや！」

不満なのは野伏達も同様だ。もっと怯えて貰わねば、やり辛くて仕方がない。

小馬鹿にするような口振りに、若侍は落ち着いた口調で答えた。

「飛鳥井流と、新当流を少々」

「あすかしい？ 聞かねえなア？」

なあ、と野伏の頭領が背後の仲間へ同意を求めると、下卑た笑いが巻き起こる。

「おおかた兵法家気取りつてどこか。さぞかしご高名なんで御座いましょうねエ」

「おのが駿河—— 駿河、彦五郎」

若侍は爽やかに笑い、名を告げる。

そして「刀と蔵春は無理だが」と続けた。

「銭ならやるぞ？ どうせ世の回りものだ。お互い、わざわざ怪我をする事をもなからう」

「しやらくせえっ!!」

若侍相手に談合した等、手勢に自分を舐めさせる要因になりかねない。

いきりたつた頭目は踏み込みざま、振りかぶつた長巻を彦五郎へと叩きつける。

——が、て手心配が無い。

見れば、振り下ろした長巻の穂先が消え失せていた。

「な……ッ！」

見開いた頭目の視界に映るのは、一瞬にして彦五郎の手に現れた刃の煌き。

その二尺六寸ばかりは曇り一つ無く、まるで雪景色のように輝いている。

一目でわかる名刀の、目にも留まらぬ早業である。

そして片手抜き打ちで長巻を切り飛ばしたその手首が、滑らかに刀を返す。

「アアアアアアアア!!」

奇怪な氣勢と共に振り下ろされた豪剣の峰が、強かに頭目の額を打ち据えた。

「ぐわっ!」

脳天に響く衝撃にもんどり打って倒れる頭目。

意識を失った彼が、この後の事の推移を見逃したのは幸か不幸か。

「かしらアッ！」

悲鳴か怒声か、その両方か。

ともかく叫びをあげた野伏の一人が、手槍を片手に彦五郎へと突きかかった。

俗に槍は刀の三倍強いという。

事実、間合いが違う。初撃の速さが違う。繰り出す穂先は点である。それを彦五郎は奇妙な歩調でもって、するりと潜り抜ける。

追いかけた左手が、刀の柄つかを後から支えるように握った。

「ヤアアウツ!!」

流れるような横一閃。

腹を打ち据えられた槍持ちはしは息詰まり声もなく、崩折くずおれるように倒れ伏す。

「ぬ、ぬ、ぬ……ッ!」

残ったのは、野太刀を持った一人のみ。

頭目か、あるいは槍持ちと共に打ち込めば良かったものを、機を逃したのだ。

男は齒齧みしながら両手に唾をくると、野太刀を大上段に振り被った。

「おおッ! やあアツ!!」

野伏は氣勢を上げながら、摺足すりあしで間合いを詰めにかかる。

槍ほどではないにせよ、野太刀と刀では野太刀が有利。

それに一縷いちるの望みを託し、野伏は勢い任せに大太刀を叩きつけた。

剣戟音。

大振りな野太刀を、両手で捧さかげるように構えられた刀が、しっかと止めている。

受け太刀である。

刃が噛み合ったその途端、彦五郎は野太刀を釣り上げるようにして内懐へ飛び込む。

「オオウツ!!」

「ぎゃっ!?!」

次の瞬間には、彦五郎の一閃が男の肩を砕いていた。

悶絶しながら茂みへと転がる野伏を他よそ所に、彦五郎は刀に血振りをくれた。

無論、一滴の血も流してはいない以上、これは単なる習慣に過ぎない。

ぱちりと音を立てて納刀されたのを見計らい、蔵春があくび混じりに声をかけた。

「終わった?」

「うむ」

当然の結果と言わんばかりの蔵春へ、彦五郎はのんびりと歩き出す。

ちらと目を向けた背後には、茂みの中から見え隠れする、野伏達の赤備え。

と、何を思ったか、彦五郎の唇が歌を口ずさんでいた。

——旅ならぬ 身も住はてぬ 世成けり 道の巷ちまなの 四方よもの行かひ

ふむ、と。蔵春の眼前で、彦五郎は立ち止まった。

「どうだろう」

「下手な腰折れね」蔵春は、つまらなさそうに言った。「そのままじゃない」

「まったくだ」と彦五郎は頷く。

「元康の読み方は、どうも己には合わないらしい」

「もつと頭を捻って考えなきゃ、彦五郎には詠えないわよ」

「かもしれん……ともかく、行こう。三河までは無理でも、今日中に白須賀にはつきたい」

「はいはい。あ、わたし白須賀で柏餅が食べたいなあ」

「なら、急ぐとしよう」

街道を西に向かつて行く彦五郎の横へ、小走りで蔵春が並んだ。

——大方、帰りは道を変えよう、なんて事も思っているのでしょうか。けれど。

歌作に耽り、額に汗してううむと唸る男の横顔。

それを盗み見て、彼女は「くすり」と柔らかに微笑む。

——やはり彦五郎は、こうして悩んでいる方が似合っている。

そう思いながら、ちらと蔵春の脳裏に背後で倒れた野伏達の姿が過った。

「兵どもが夢の跡……。旅人でもなくなつてまともに住み通せない世の中よね、なんて」

「……………」何か言つたか？」

「ううん、何でも」

蔵春は、彦五郎にゆるく首を振って応じる。

武田信玄が今川家の治める駿河へと攻め込んだのは、ほんの数年前の事だ。

不安定なものとはいえ甲駿同盟を破つての……つまりは裏切りである。

折り悪く今川家は、桶狭間で東海一の弓取り義元公と重臣とを一纏めに喪つたばかり。

残る家臣から二十余名が裏切りに走り、駿河は瞬く間に武田の手に落ちた。

さらには松平——改め、徳川家康の離反と侵攻。

当然、これを防ぐ手立てはない。

這々の体で逃げ延びた嫡男は、妻の実家である北条氏を頼るも、そこで終わり。

蹴鞠と和歌に興じるしか取り柄の無い凡夫など、旗頭にして何になろう？

やがて彼は放逐され、帝より天下一苗字を許された今川家は、呆気無く滅び去った。

しかし数多くの大名家を滅ぼし、領地を拡大し続けていた武田家も、今は昔。

軍師山本勘助、虎と呼ばれた武田信玄も死に、長篠の戦いで騎馬武者隊を破られ……。

飛ぶ鳥落とす勢いの織田信長に押され、武田四郎勝頼は息も絶え絶えと言つた有り様。

蔵春は思う。

もしも武田勝頼、いや、先の野伏が、傍らを行く彼女の夫の事を知つたら。

果たして、どう思うだろう？

その夜、浜松城下。

かつての曳馬という名が、縁起が悪いと改められてから十年余り。浜松は不夜城の様相を呈していた。

城の普請は長く続き、仕事の口も多く、京の都から東へ向かう旅人も良く訪れる。自然と彼らへの商いで街は賑わい、店が並び、宿も増え、夜も明かりが煌々灯る。かつての松平元康こと徳川家康の治世により、浜松は大いに栄えていた。

徳川が三方ヶ原の戦いで武田に大敗を喫したのも、今は昔の事だ。

長篠の合戦以来、武田は陰り、清須同盟の先行きは明るい。

その光は浜松の片隅にある、ひっそりとしたこの茶屋にまで行き届いている。

耳を澄まさずとも酒に興じ、女と遊ぶ賑やかな声が、どの座敷からも聞こえるだろう。無論この茶屋を訪れる客も、働く奉公人も、皆「弁えてい」者ばかりだ。

大名格ではないとはいえ、あまりハメを外すと務めに差し障りの出るような臣下。

此処はそういった人々が羽根を伸ばし、寛ぐための、風格のある茶屋なのだから。であるからこそ万千代は、心置きなく、苦虫を噛み潰したような顔で酒を煽った。

当年取って十七歳。

げんもぞ 衣服を間近に控え、垂らした前髪も見目麗しい、紅顔の美少年である。

若年ながらも浜松城主、大殿、徳川家康の小姓という大任を務める身。

主君の太刀を預かり、横で捧げ持ち、有事の際は抜刀するのだ。

いわば身辺警護役である以上、人前で醜態を晒すのは容易な事ではない。

結局、万千代は悩んだ末、初めて一人でこの茶屋を訪れた。

如何に武士といえど、万千代にも歳相応、身分相応の見栄も矜持も興味もある。

彼は隣に感じる暖かさと柔らかさ、甘い香りに、懸命に洗面を保とうとしていた。

「あら、あら。せつかくの若武者振りが、台無しではありませぬか」

白百合のような女であった。

清楚な白い小袖に、結び上げた髪型。何処ぞの奥方と言われても違和感はない。

だが、しどけなく着物を崩した姿には、どきりと心の臓を跳ねさせる艶やかさがある。

傾国、傾城の美しさ。これほどの美女が、この茶屋にいたのだろうか。

いれば必ず、同輩の間でも噂になるだろうが——……。

「何か、御座いますか？」

「あ、いや……」

あでやかな笑み。万千代、ごくりと唾を呑む。

漂う甘い匂いは、化粧のそれではない。花だ。花の香だ。

「じ、実は……今朝方な」と、彼はなるべく厳しい口調を装って言った。

「牢人と、その妻とやらが、城を訪れて来たのだ」

「あら、牢人……」と、女が袖で口元を隠し、驚いた風に隣く。

「仕官を求めている事では、ありませんか？」

「いや、違う。牢人風情が……殿に御目通りを、と……！」

家臣でさえ、評定の席はおろか御目通りの権利を持つのは一握りの重鎮のみである。

一介の牢人風情が殿と顔を合わせようなどは、無礼千万も良い所。

にもかかわらず大殿は、その牢人の名を聞くやいなや、目通りを許可したというのだ。

「その、御牢人の名は？」

「駿河」

万千代は、ぐいと酒盃を煽り、吐き捨てるように言った。

「駿河彦五郎」



万千代が驚いた事は、三つあったという。

「おお、元康！ 久しいな！」

まず目を剝いたのは、開口一番の、畏れ多い挨拶であった。

戦に備えた浜松城に、華美な太守は無い。

駿河彦五郎が通されたのは城の本丸、要の二重櫓である。

そこへ踏み入った彦五郎は殿に平伏するでなく、にこやかにこう言ったのだ。

万千代は、殿の御前でなくば、その場で無礼討ちに切つて捨てようかと思つたという。

しかし彼の主君は満面の笑みで立ち上がり、

「彦五郎殿も、壮健なようでは何よりだ」

あろうことか、その牢人の肩を親しげに叩いたのである。

実に、ありえないことだった。

六十万石、つまり六十万人を一年養える男と、一介の牢人のやり取りではない。

狸などと嘲られることもある徳川家康だが、その実、筋骨隆々とした大男。

長きに渡る人質生活を経て尚、頑健気骨と讃えられる三河武士そのものだ。

しかし大黒が如き顔は、笑みを浮かべると人を安心させる、柔和なものになる。

仕えて二年の万千代も、家康が微笑む所は幾度となく見てきた。

だが万千代も、自分の主君がこれほど親しみを露わにするのは初めてであった。

彼らはまるで十年來の旧友であるかのように、膝を突き合わせて腰を下ろす。

家康は、にこにことした顔を変えぬまま、満足そうに頷いた。

「藏春殿も、相変わらずお美しいですな」

「どうも、ありがとうございます」

二人からやや離れた所に座していた娘が、つんと澄ました様子で応じる。やはり、万千代は驚いた。

娘——蔵春の装いに、である。

牢人然とした駿河彦五郎に対して、この娘は明らかに傾奇者。

いや、婆娑羅と呼ぶのが相応しかろう。

太平記によれば、婆娑羅とはヴァジュラ、すなわち金剛石の意であるという。

身分や状況に左右されぬ絢爛豪華な装いをする者、と言えば聞こえは良いが……。

婆娑羅者が不遜であると禁じられたのが足利尊氏將軍であるから、二百年は昔である。

ずいぶんと時代錯誤……いや、幕府が衰えた今、却って新しくさえあるのか。

そんな風な事を万千代が考えていると、家康がまず先に口火を切っていた。

「そういえば、彦五郎殿。最近、歌の方はどうですか」

「ああ、うん。実はなあ、元康」

問われた彦五郎。バツが悪そうに頭をかいて、

「此処の所、どうにも良いものが浮かばん。言葉遊びが、なかなか難しゅうてな」

家康は、これを聞いて呵々と笑った。

「釈迦に説法。とは申せ、心の赴くまま、好きに詠むのも良いものですぞ」

「ふうむ……」

腕を組んだ彦五郎が、初夏の風を運ぶ、開け放たれた窓の外へ目をやった。

そこからは城下の町並み、遠くには浜名湖を望む事ができる。

さして高い櫓ではないけれど、浜松一の景観である事に疑いはない。

日差しは高く、空は青く、雲は白く。

目を細めて眩しげに見ていた彦五郎が「うん」と小さく頷いた。

——久しげに 友と眺むる 雲の峰 あな眩しやと 遠き日を見ん

そう吟じた彦五郎は「腰折れだが」と、軽やかに笑った。

「たまには詠み方を変えろも一興だな。己も少し、元康流にやってみるか」

「気も変われば歌も変わりますでな」家康は目を細めた。

「拙者も、彦五郎殿のように言葉を捻ってみましょう」

「それで、家康公」

びしやり、と。

「私の夫を浜松まで呼び出したのは、まさか昔話をする為では無いでしょうね」
二人の会話を切り裂くように、蔵春の冷やかな声が割って入った。

「己としては、それでも良いのだが……」
「良くないわ」

「彦五郎、話し始めるとキリがないんだから」

三度、万千代は驚いた。

本来、武家の妻女は、夫と友人の会話に同席する事さえも憚るものだ。ましてや口を挟むなどは以ての外であるう。

にもかかわらず蔵春という娘、さも当然と言わんばかりの、傲岸不遜な振る舞い。型破りにも程がある。いや、なればこそ婆婆羅と呼ぶのかもしれないが……。

「いや、いや。何も、今の和歌の話も無関係というわけではないのだ。」

慌てて家康が掌を振ってみせる。

ともすれば滑稽な、しかし自然と人の気を解すような仕草。

「紀伊攻めを終えられた信長公が、今、京の都におられるのはご存知か？」
「うむ」

「実は近く、信長公は帝より右大臣の官位を頂く事になっておってだな」

「元康」彦五郎は苦笑した。「持って回った言い回しはお前の悪い癖ぞ」

「おお、すまん、彦五郎殿」と、家康は心じる。

「その前には是非ともまた、彦五郎殿の蹴鞠を見物しておきたいと仰せなのだ」
「己の蹴鞠をか！」
途端、彦五郎が童子の如く、ぱつと顔を輝かせた。

「そうか、そうか、己の蹴鞠か。うん、うん、悪く無いぞ！」
喜色満面。彦五郎ははしゃぐように何度も頷く。

それを見て、蔵春が「ああ」と僅かに溜息を漏らすのを、万千代は聞いた。

万千代としても、その想いはわからないでもない。

蹴鞠など、公家の興じる「お遊戯」に過ぎず、武芸とはかけ離れている。いや、万千代も蹴鞠を見たことはない。

だが貴族や公家の遊びなど、そのようなものだろうと思っていた。

故、駿河彦五郎という男が、牢人の立場に甘んじているのも当然だろう。

しかし、万千代はそれらの嘲る思いを表に出さぬよう、きゅつと唇を噛みしめる。蹴鞠を見たいと仰せなのは、織田上総介信長公。

主君、徳川家康の盟友であり、天下を掌中に納めんとしている猛者なのだから。

「ま、とはいえ、昨今は物騒であるから……万千代」
「……はっ！」

不意に名を呼ばれ、万千代は我に返った。

彼は両手で刀を持ちながら、膝を擦るように家康の元へと寄る。それを領いて待ち受けた家康は、ついと手を動かし、彦五郎を示した。「刀をこれに」

「は？」

失態である。万千代は、主君の意図を解せず、呆けたような声を出した。しかし家康はそれを咎める事もせず、噛んで含めるようにして続ける。

「そなたが持つておる、刀だ。それを、彦五郎殿に」

「えっ？ いや、しかし、殿。御言葉ですが、それは……」

万千代は、何と言つて良いものか、信じ難いという様子で呟いた。

無論、万千代の御役目は、この刀一つにのみ向けられた物ではない。

ましてや刀の主人は、万千代ではなく目前の主君である。当然のことだ。

これは万千代にとつても、また家康に取つても、数多ある刀の一振りではない。ない、はずなのだ。

しかし、どうにも躊躇われた。

それは家康公から刀を賜る、その有り難みを理解していない牢人。

さらに、不適な態度で此方を注視している、あの婆婆羅娘。

二人への反感が齎した、葛藤であった。

万千代が家康へと仕えて二年。

領土を与えられ、小姓の御役目まで与えてもらった身だ。

だが、彼はまだ、家康から刀を授けてもらった事は、ない。

なのに、どうしてこのような牢人風情が、と。

「万千代」

その思いを見越したかのように、家康が穏やかな口調で繰り返した。

「……………はっ！」

万千代は、決して忘恩の徒になりたくはない。

彼は家康への深い忠誠でもって感情を押し殺す。

平伏し、牢人へと刀を文字通り捧げ上げる。

「うむ」

それを、さも当然というように駿河彦五郎は受け取った。

まるで友と物の貸し借りをするような、ひどく無造作な手つきである。

であるならば、鯉口を切つて刃を改めるのも当然のこと。

「……………ッ！」

思わず腰の物に手をかけんとする万千代の目に、銀の光が飛び込んできた。

それは雪の煌きに良く似ていた。

目にも鮮やかな白銀の刃は、身震いするほどの美しさを秘めている。二尺六寸。思わず見惚れる、それは紛れもない業物、銘刀の証だ。

「……うん」
彦五郎は慣れた手つきで刀身に浮かび上がる刃紋を、指先で撫でた。確かに、承った」

ばかりと音を立てて、刀が鞘へと滑りこむ。
その納刀の手付きは、悔しいかな、万千代の目からみても見事なものだった。



「……そう、拙者の担いでいた刀を、あの牢人にくれてやったのだ、大殿は」
そう言つて、万千代は酒精の多く混じった息を吐いた。
彼の周りには、空になった銚子が随分と転がっていた。
はて、いつの間にこれほど飲んだのだろうか？

「それで、お武家様」
首をかしげる万千代の心に、すると、白百合の女の声が入り込む。
「駿河彦五郎という牢人について、殿様はなにか仰つていて？」

途端、細やかな疑問などは雲散霧消した。大した事でもあるまい。

「そういえば……」

万千代は霞むような思考を振り払うように首を振り、呆けた声で呟いた。

「なんでも、今川の係累であるらしい」

「あら。まあ」と女は目を瞬かせる。「今川の……」

万千代は忌々しげに呻いた。

今川家といえは、主君家康公を長らく虜囚としていた怨敵。

そして万千代の父、井伊直親を、逆臣として誅殺した仇でもある。

万千代——後に元服して家督を継ぎ、直政と名乗る少年も、また僅か十七歳。恨み辛みを押し殺すには、若きに過ぎる。

あれが殿の御前でなく、またあの牢人者が信長公の客でさえなくば。

「他には、何か御座いますか？」

しかしその憤怒も、女の甘やかな声が瞬く間に蕩かしていく。

「三つ……。いやさ、刀を与えた事にも驚いたから、四つか。拙者が驚いた事は四つある」

万千代が、新たな酒を求めて、ふらふらと覚束ない様子で手を伸ばす。

「まず、挨拶。次に娘の装い。その態度。刀。それから、つまり五つ。……」
その手が、くたりと落ちた。

白百合のような女が、すつと立った途端に、である。微かないびきを漏らして突つ伏す万千代を他所に、女は座敷を後にする。そのまま茶屋の中を抜け、浜松の街へ。

しずしずという慎ましい歩き方。しかし、足音はおろか、衣擦れの音さえ無い。するすると夜道を行き交う人々の間をすり抜け、すれ違ふ、女。

此れほどの美貌であるにもかかわらず、誰も彼女を気にも留めない。後に残るのは甘やかな花の香りのみ。

その女が、不意に道を逸れた。

城下の外。暗く、黒く、覆い繁る、森へ。

人の通うのも困難な獣道。枝葉が、下生えが、砂利が、行く手を阻む。

それを、まるで屋敷の廊下を歩むが如く、女は行く。

異様であった。

ほどなくして、女の足がぴたりと止まった。

その目前には古び、忘れ去られ、苔むした社が一つ。

「鈴蘭」

と、不意に、ひどくしゃがまれた、奇妙に甲高い声が響く。

獣が無理やり人の言葉を出せば、このようになるだろうか。

鈴蘭、そう呼ばれた女が、さつと身を強張らせて 跪く。

美しい白の着物、その膝が汚れる事も厭わずに。

それに伴い、ぼうと、暗がりから浮かび上がるように「顔」が現れた。

墨を塗りたくったかのように黒い、夜の中にあつて尚暗い、老爺の「顔」。

仏の化身であるという翁の面……。

「黒式尉様……！」

畏まる鈴蘭の前、ただそれだけが、ほんやりと闇の中に浮かんでいた。

「首尾は、どうか」

「はい。刀は今、駿河彦五郎なる牢人者の手に」

「駿河……」

「今川の係累との事に御座いますが、真実かどうかは……」

それを聞き、黒式尉の言葉が僅かに途絶えた。

さわさわと湖を越えて吹く風が、森の草木を揺らして抜けていく。

俯いて控える鈴蘭の、その白い肌に、脂汗が僅かに滲む頃、

「……おのれ、焼き味噌垂れめが。やつてくれおるわ」

黒式尉は、地獄の鬼が喉の奥から立てるような声をあげ、笑った。

そのあまりの悍ましさと、恐ろしさに、ぶるりと鈴蘭が身を震わせる。

「では、直ちに追跡を——……」

と、告げたのは使命感のみならず、一刻も早くこの場を離れる為であろう。

「良い」

彼女の心根を知ってか知らずか、黒式尉は愉快そうに言い放つ。

しかしもしも、黒い翁の面に空いた穴の向こうに、瞳があるのならば。

その瞳は虫けらを相手にする人のように、一切の暖かみが無かつたろう。

「既に白須賀宿で、乾壁虱丸が動いておる」

「なんと、壁蝨丸が……」

鈴蘭は、目を見張った。

「お主は、そのまま次の下知を待て」

「……はい、黒式尉様」

鈴蘭は恐怖と畏れから、黒式尉の気配が消えて尚、身動きが取れなかった。

如何にして現れ、如何にして消えたのか。

遙か十里先の白須賀宿まで、どうやって瞬時に情報をもたらしたのか。

それは彼女には想像すらできない、底知れぬ、何か空恐ろしいものであった。

無論、鈴蘭は決して、そのような疑問を口に出すような事はない。

忍びの術とは、須く隠匿されるものである。

それを明かすという事は、何方か一方が死ぬ時なのだから。

三

東海道——とはまだ名付けられておらず、未だ整備されていない旧街道。

鎌倉様の頃よりあるというその道を、浜松から西へ十里余り。

渡し船で浜名湖を越え、長く続く坂を登った先。

夕暮れに赤々と染まった海辺の宿場街こそが、白須賀である。

「潮見の坂っていうけれど、本当にそうなのね」

海からの風を受けて髪をなびかせながら、蔵春が心地良さそうに目を細めた。

坂の上より海を一望できるその景観は、成程、絶景である。

東へ向かう旅人が名残惜しげに、西への旅人が思わずと言った風に足を止める。

彼らに混じって彦五郎らも立ち止まり、しばしその景観に見入った。

と、やはり目敏い者はあるもので、宿場の目前だというのに茶店が一つ。

なるほど。確かにこの眺めを楽しみながら、一服したくなるのが人情というもの。

夕刻であるから椅子は片付けられていたが、まだ店は開いているらしい。

「どれ、急ぎ旅だ。白須賀見物をする暇もあるまい」

懐中より財布をまさぐりながら、彦五郎は言った。

「せっかくだし、此処で柏餅を食っていくとするか」
「やった！」

それを聞いて、蔵春が手を打って喜んだ。

茶屋の主は、腰の折れ曲がった老婆であった。

柏餅はあるかと問うと、老婆はにこにこしながら「ちよとど二つさね」と応じた。

「夫婦でお伊勢参りかえ？」

立ったままで悪いがと、二人へ茶を供しながら老婆は問う。

「うむ」と彦五郎は頷き、それから首を横に振った。

「浜松から、都へな。だが、帰りに伊勢へ寄っても良いと思っている」

「どうせ気楽な牢人だものね」

横から蔵春が、つんけんした声で口を挟んだ。

「そうかえそうかえ。この御時世だからねえ。仲良いのが一番だ」

困ったように頭をかく彦五郎を見て、老婆がからからと声を上げて笑う。

「柏餅は縁起物だからね。柏ってのは、新芽が出るまで葉が落ちないんだ」

その細められた目が、蔵春のほっそりとしたしなやかな体軀へと向けられる。

老婆はにんまり笑うと、何やら含みのある声で言った。

「きつと、子宝に恵まれるよ！」

「……ま、当分先でしょ」と、蔵春はそっぽを向いて、柏餅をぱくついた。

その頬が紅色なのは、さて夕陽のせいか、そうでないのか……。

如何な戦国乱世といえど、人の往来がなければ成り立たぬのが世の常だ。

戦はある、野伏はうろつく、物騒極まりないが、それでも行き来する者はいる。

むしろ野伏などは旅人を獲物としている以上、いなければ干上がってしまう。

遠江国の西端、三河国との国境である白須賀は、自然と良く栄えていた。

通りは旅人や、夜の楽しみを求める人々でごった返し、実に賑やかである。

そうした旅客の多さが、彦五郎と蔵春とを救った。

遅い到着であっても選ぶ余裕があるほどに、旅籠が幾軒も並んでいたのだ。

二人は惜しげなく銭を払い、風呂のある、中の上といった格の宿を取った。

明日早くの立出であるから、朝食は無用。風呂だけを貸してくれ。

そうして早々に部屋へ引き上げた夫婦を、下働きの人々はどう見たか。

ともあれ、実に対照的な二人ではあった。

如何にも牢人者といった風の彦五郎は、質素な木綿の浴衣。

対する蔵春は、薄く桜色に上気させた肌に、ぞろりとした真紅の長襦袢

南蛮から持ち込まれ、ここ十年、二十年で急に流行った新しい肌着。

寝巻き姿であるにもかかわらず、はつと息を呑むほど、その姿は華やかだ。

「……何よ」

彦五郎の視線を感じ取ったか、蔵春が唇を尖らせて言った。

「いや」と彦五郎は首を横に振り「似合っていると思っただけだ」

「そ」

蔵春の返事は酷く素っ気ないものだ。

「ありがとう」

そうして、娘の体を掻き抱くように、二人は一つ布団で床についた。

目を閉じると遠く閉じられた障子窓を越え、潮騒が此処まで届いてくる。

互いの体の温もりと合わさって、波間に揺られているかのような心地良さだ。

「……ね、彦五郎」

不意に、蔵春が彼の耳元へ唇を寄せ、囁いた。

「やっぱり、楽市楽座って良い案だったのね」

彦五郎は微かに笑った。

「上手く行けば、の話だとも」

楽市楽座とは、つまるところ市場の自由化である。

織田信長のそればかりが有名だが、何も彼が最初、というわけではない。

商いは税に繋がりが、税は富国に繋がるのだから、これを尊ばない大名はいない。信長公に先んじて、例えば今川家などは率先して行っていた。

にもかかわらず信長公のそれが有名なのは、彼の手腕の賜物であったろう。

「信長公も、元康も、凄い御仁だ。見事に使いこなしておるわ」

快活に、あっけらかんとした様で言う彦五郎。

彼の顔を、じいっと見つめた蔵春は、

「……うん」

と小さく頷き、それきり黙りこんでしまった。

静か……というのとは、少し違う。

実に穏やかな夜であった。

——うつつにも あらすなりぬる 昔かな おもひ出せば 元の身にして

眩くように歌を詠み、彼は笑みを深めた。手を伸ばし、小さく細い妻の手を取る。

昔のことは今ではない。昔と今で、己の何が変わるものでもあるまい。

そっと軟い力で握り返すその指先から、とくり、とくりと漣のように鼓動が伝わる。

蔵春の微かな吐息。暖かさ。宿のすぐ外は浜辺だ。砂を削る海の声。

それらが渾然一体となつて交じり合い、彦五郎の全身を蕩かすようだった。遠く、近く、浪の打ち寄せる音が、子守唄のようにさえ思えてくる。

その潮騒の音が、ひときわ大きくなつた時。

彦五郎は飛び上がるように跳ね起きた。

転げるようにして身を屈め、枕元の刀を手に取り上げる。

眼前に構えられた鞘に突き立つは、きらきらと微かに煌めく幾条かの光。それは五寸もあるうかという細く長大な、針であつた。

同時に、彦五郎の手から鋭い銀光が放たれる。

鞘に仕込んだ小柄による、見事なまでの抜き撃ち、文字通りの早業。

しかし小柄は、さつと宙空で掻き消えた。

……いや、掻き消えた、かのように見えたのだ。

手、である。

天井隅の暗がり、闇が淀むように蹲つたそこから伸びる手。

常人の三倍はあるうかというそれが、小柄を掴み取っていた。

「ひこころう……？」

鼻にかかった、甘えたような蔵春の声。

そちらに一瞥をくれる事もなく、その闇の手と対峙しながら。

彦五郎は、酷く穏やかな声で呟いた。

「氣遣い無い。寝ておれ」

「ん……」

刀の鯉口を切つて鞘を払う。

いつの間にか障子の開かれた窓——そこより異形は恐び込んだのだ。

朧に差し込む月光を受けて、刃が雪のように煌々と輝いた。

刃に浮かび上がる紋様は、それそのものが芸術のような美しさである。

その光を受けて。

「恨み辛みは御座らぬが」

天井の隅より、しゅう、しゅうと。

地底から瘴気が吹き出すような吐息混じりに、異形が言った。

「故あつて、御命、御刀、頂戴致す」

「故、と来たか」

彦五郎は愉快そうに言った。

その直接的な物言いは、如何にも刺客の言葉らしく思えたからだ。

「となれば、この刀の由来も知っておられるわけだな」

果たして、闇の中から返事があつた。

「——義元左文字」

かつて刀匠正宗の十人の高弟、正宗十哲の中に、左衛門三郎源慶という男がいた。「左」一字を銘に刻む事から左文字と呼ばれた、彼の鍛えた一振り。それこそが義元左文字。

刃渡り二尺六寸余り、運命の太刀であった。

源慶は「左文字を持つ者は天下を取る運命にある」と、そう言い残したという。事実、かつてこの太刀を持った者は、いずれも天下への道を歩んだ。

一代にして畿内を征した三好宗三。

次なる所有者は甲斐の雄、武田信虎。

そして最後には東海一の弓取り、今川義元の佩刀となった。

——故に名を、義元左文字。

無論、天下を目指すという事は、破滅と表裏一体である。

三好宗三は合戦の中で孤立し、籠城した城に攻めこまれて討ち死に。

信虎は嫡男信玄との不和により追放され、失意の内に没した。

そして今川義元と共に、義元左文字は桶狭間の戦いで失われた——筈であった。こうして牢人の手に握られ、燦然と刃を煌めかせるまでは。

「ご明察」

天下太刀を無造作に持ち、鞘を帯へ挟みながら、彦五郎は囁いた。

「お手前の名を聞きたい」

「……………」

「対手の名もわからぬでは、死んでも死にきれん」
ぶるりと。

天井の闇が、身を震わせる。

「甲賀」

闇が誇らしげに応じた。

「甲賀金烏衆が一人、乾壁蝨丸」

甲賀、つまりは忍びである。

忍びが、堂々と名乗りを上げた。

奇異な事ではあるうが、しかし領ける理由がある。

刺客がこうして存在を明かす以上、無論、必殺の自負あつての事である。

その標的から、こうも潔い態度を取られれば、どうだろう。

胸中で、むくむくと自尊心が膨れ上がるのも、致し方あるまい。

「かたじけない。己は……新当流、飛鳥井流、牢人」

返礼は、堂に入ったものだった。

「駿河」

駿は道場で相手に向かうように、剣を青眼に構えたまま、真つ直ぐに天井を見る。

「駿河彦五郎」

「存じておる」

「そうか」

彦五郎は軽やかに笑い、闇の中でも誰かがくつくくと軋むように応じた。と、銀光が宙を飛び、彦五郎の太刀が横薙ぎに走った。

ちやりんちやりんと弾けるような音を立てて、針が畳上へと落ちる。

再度攻勢に転じた刺客の針を見越していたかのように彦五郎が防いだのだ。

その勢いのまま、さっと彦五郎が駆け、そして開かれた窓から夜に飛ぶ。

毬のように屋根瓦の上へ跳ねた彦五郎を追い、闇もまた動き出した。

暗がり、天井の隅より、ぬうと伸びた長手が這い出る。

常人の二倍、三倍はあろうかという手の指先が、しつかと梁を掴みとる。

続けて左手、右足、左足——どれもこれも、恐るべき長さである。

紛れも無い、異形。

蜘蛛を人型にむりくり押し込めれば、こういう姿になろうか。

指先だけで壁を、天井を這う、尋常ならざる手長足長の忍び。

それこそが、乾壁蝨丸であった。

眼下で、何事もないかのように眠る娘のあどけない寝顔を見て、壁蝨丸は思う。

——哀れな女だ、これから亭主が死ぬとも知らないで、と。

音もなく滑るように窓の隙間から屋外へ転じた壁蝨丸を、ざっと潮風が襲う。

その真向かいに、駿河彦五郎の姿があった。

手に下げた天下太刀に月光を煌めかせながら、壁蝨丸を待ち受けている。

に、と。壁蝨丸は乱杭歯を剥きだした。

「参るぞ」

「応とも」

壁蝨丸はシャツと一声吠えるなり、駆けだした。

応じて彦五郎が、素足で瓦を踏みしめ、走る。

戦いが始まった。

壁蝨丸が長大な四肢を蠢かせる度、音もなく銀光が屋根上を飛び交う。

それが彦五郎の振るう剣と交差する度、長針が瓦の上を弾けて落ちる。

彦五郎が瓦を踏んで斜めに疾駆すれば、それを追って壁蝨丸が匍匐する。

もしこの光景を余人が見たなら、どう思っただろうか。

さながら銀の糸を吐く土蜘蛛と、源頼光の対決もかくや、といった様相であったろう。

——いや。

事此処に至って、壁蝨丸は考えを改めた。

——追い詰めたのではない。釣り出されたのだ。

明かりの下に晒されれば、如何な含み針といえど、軌道は目に見える。夜天に煌めく月は、今まさに、壁蝨丸の敵へと転じていたのだ。

成程、駿河彦五郎。油断ならざる相手であった。

だが、と。壁蝨丸は笑う。

彼の秘技を、ただの針遊びと思われては困る。

所詮、含み針などは小手先の技に過ぎない。

彼の真価は、異形の四肢を駆使した体術にこそ有るのだ。

「お、おっ!!」

壁蝨丸が、小柄を投じた。先に彦五郎の放った小柄である。

放物線を描き天空より、やや遅いとさえ言える速度で刃が落ちる。

と、同時、壁蝨丸の異形の四肢が屋根瓦を噛んで、飛び出した。

「む……」

と、唸った彦五郎。果たして、壁蝨丸の意図に気づいたか。

「アアリッ!」

次いで、奇怪な氣勢が彦五郎の口から迸った。

夜天を切り裂くような上段の一振りだが、小柄を真つ向から叩き落とす。

だが、それこそが壁蝨丸の術であった。

頭上より飛来する小柄を迎え撃てば、壁蝨丸が。

壁蝨丸を迎え撃とうにも、まず迫るのは異形の前肢。

両腕を掻い潜る事ができたとしても、小柄が落ちる。

三段構え。尋常な剣客では、これを掻い潜る事はできまい。

森羅万象戦場を自在に操ってこそその忍者。

蜘蛛巣様の必殺の術策。これぞ壁蝨丸の忍術であった。

——殺った!

牙を剥き出した壁蝨丸の両手が、両腕が、彦五郎の首目掛けて伸びる。

それは正しく獲物へ飛びかかる蜘蛛の動きであり、

「ヤァァウツ!!」

彦五郎のそれは、正しく毬を蹴るが如くであった。

鈍い衝撃。

碎け散る破片。

ぐらりと震える視界。

壁蝨丸の頭蓋で脳が揺れ、彼は一瞬の混乱に陥った。そこから気を取り戻すのに一瞬。何が起きたのかを把握するのに、また一瞬。瓦である。

彦五郎は、屋根瓦を蹴りあげたのだ。そう気づいた時、既に彦五郎は滑るようにして壁蝨丸の懐へと飛び込んでいる。壁蝨丸の目が見開かれ、含み針を放たんと頬が膨れる。彦五郎の手首が回り、刃の峰が、返される。もう遅い。

「オオオウッ！」

左文字が、横一線に壁蝨丸の胴を打ち抜いた。

かはつと肺の内から空気が絞り出され、口からはバラバラと針が散る。

そのまま壁蝨丸は、叩き落とされた虫も同然に藻掻きながら、海辺へと落ちていった。夜の海に、水飛沫があがる。

生まれた波紋が消え行くのを見やると、彦五郎は血振りをくれて左文字を納刀した。無論、血は一滴も流しておらず、その刃は曇りなきままだ。

——蜘蛛の罠を 払いのけるも 厭わしく 逃してやるも 難しく

「……腰折れだな」

新当流の極意に、「見越しの術」と呼ばれるものがある。

突き詰めればそれはただ、先を「見越す」という事に他ならない。

だが、あまねく遍く戦い、その尽くを「見越せ」ばどうなるか。

今まさに彦五郎が体現した通りである。

駿河彦五郎は潮騒の音から何者かの侵入と襲撃とを「見越し」、針を防いだ。

そして窓から差し込む月光から雲が晴れた事を「見越し」、外に飛び出た。

屋根を戦場に選んだのも、より長い間合いを持つ、瓦を武器とする為。

その上で。

飛鳥井流宗家ですら容易に成し得ぬ絶技を知らなんだ事が、壁蝨丸の敗因であった。もつとも、それは致し方ない事といえる。

それは剣術でもなければ体術でも、忍術でも、そもそも武芸ですらない。

蹴鞠の、秘技なのだから。

窓辺からするりと入り込むその気配に、蔵春はそつと臉を開けた。その気配は物音一つ立てず、彼女の眠る布団へと潜り込んでくる。頬を膨らませ、不貞腐れたように彼女は言った。

「彦五郎、遅い」

彼女の夫は「すまん」と特に言い訳もせず、微かに笑う。

それがまた無性に気に入らず、蔵春はその体を抱き寄せると胸元に顔をうずめた。肌貼た浴衣から除く胸板は、日に焼けて浅黒く、また微かに潮と、汗の匂いがある。

——血の、鉄錆の、あの嫌な臭いは無い。

「……良い。許す」

それに満足を覚えたか、彼女はそのまま目を閉じた。

彦五郎のたくましい腕が、背中に回されるのを感じる。

それに包まれて眠るのは、癩ではあつたが、やはり落ち着く事を認めざるを得ない。

蔵春は知っている。

彼女の夫が、徳川家康の手で刺客に仕立てあげられた事を。

天下太刀、義元左文字。

それを京の都が織田信長公に渡すまいと、有象無象が動き出すのは、予想がつく。

かかった獲物、信長の敵を、彦五郎が討つ。都合の良い餌だ。

蹴鞠を披露するというのは、その命懸けの使命に対する、あまりにも細やかな報酬だ。

馬鹿げている。そう思う。

だが、夫は引き受けた。引き受けるのだ。馬鹿だから。

「……蹴鞠馬鹿」

そう、彼は蹴鞠が好きだ。和歌も好き。剣だつて好きだ。

だから、まあ、良いか、と。思う。それが果たして何の罪だというのだろうか。

この乱世を彼が嫌つたとして、何故に咎められなければならないのか。

彼女——北条新九郎氏康が長女、蔵春は夫を許している。許さざるを得ない。

少なくとも、彼にこうして抱かれてるのは、安心できるから。

夫の名は、駿河彦五郎。

かつての名を、今川治部大輔上総介。

わずか一代で国を滅ぼした天下御免の無用者。

彼こそは、駿河今川氏十二代当主。

——今川彦五郎氏真、その人であった。